

学会企画シンポジウム 5

「主体的・対話的で深い学び」を問う —ポスト・コロナの授業に向けて—

企画・司会：鹿毛雅治（慶應義塾大学） 企画・指定討論：河村茂雄（早稲田大学）
話題提供：伊藤崇達（九州大学） 話題提供：生田淳一（福岡教育大学）
話題提供：楠見 孝（京都大学） 話題提供：鈴木秀樹#（東京学芸大学附属小金井小学校）
指定討論：藤村宣之（東京大学）

キーワード：主体的な学び，対話的な学び，深い学び

【企画趣旨】

「主体的・対話的で深い学び」が授業改革のキーワードと位置づけられて久しい。「アクティブ・ラーニング」の考え方を引き継いで再提示されたこのフレーズには「深い学び」という語が加えられることによって、学習の「質」が強調されたが、教師からは意味がわかりづらいという声も聞こえてくる。

一人ひとりの子どもが積極的に課題と向き合うような授業を実現するには、学習内容が十分に興味深く、意義深いものでなければならない。また、学習のプロセスで適切なサポートが適宜得られることも必要だ。教師にはさらなる教材研究が求められている。

児童生徒に集団での学習活動に参加するスキルと経験が乏しく、協同的な学習に建設的に参加できない子どもたちが少なくないなど、実践の基盤となる協働性が十分に形成されていないという実態もある。協同的な学びが成立するためには、個の存在が互いに認められ、受け入れられる学級であるかが問われる。その意味で、学級経営と授業実践は表裏一体だといえよう。

さらに「コロナ禍」により、われわれは授業のあり方を抜本的に問い直す必要性に迫られた。むしろ、これをチャンスととらえ、対面授業の意義を再確認するとともに、物理的な空間の制約を超えた ICT の活用をも視野に入れることによって、質の高い学びをすべての子どもたちに実現する可能性について考察を深めていくべきだろう。

そこで本シンポジウムでは、ポスト・コロナの授業のあり方に思いを馳せつつ、あらためて「主体的・対話的で深い学び」という用語を、教育心理学の学問的基盤に依拠して問い直すことを目的とする。すべての子どもたちの学びや成長に寄与する授業の実現に向けた課題や、近未来の授業実践について、ともに認識を深めていきたい。